新板
訓入
兎一注服兎の巻
七

1660
7

1660

三木文庫

鬼一法眼虎の巻

巻之七

目録

第一　志賀の獺貢切結んぶ之もの孫

万人の勝れたる人切れたる三位の考者

世を時そのまゝ取て蛮指海しを発ぶ者

勢為の稚て蛮百姓の娘といふ偽りの娘

第二　源氏繁昌下家樂級い名は法の函民

宮男の悪び跡引と爲る人乃足跡
まが恵る尾と出さ女房が狐のうち
栄ゆる家い巣と寄る共常盤乃松

一　まつ級の猪頁切結んだ主従の縁

禊とつぶそ〜牛の丸弁巻が人とうげ力る廣言をゆメの
よりたまりの〜てふと女とさろとひき武知坊が側よひずとか
とり。ふるまりあれてきけがぬ。わまの〜宮殿の帥能と男る数
する法眼よむろひ海ごれの知人坊主の分源と猪頁ゆ。
ひとよ牧なて男とつるぎ。猪よ花人とつぐ。迎及ぶるを
祢ぐふ奴るか。帥道をするれる。ゆ。る集と猪頁とせんや。ゆ。こ海
我よ猪るが。ば首とあるべ。ゆ。集が祈るが。海を分が家るして
永くゆるが今点ゆ。ゆのれが四人を義と猪ゆ。ゆ男よ我よう人
こすものいあじとゆるそ。ゆりけゆ。それるそ粹迎るが多い。
燕石を衷を圓を殿ゆ圓と第て滝海よ滝ゆ猪道ゆるの

やういひいたくまよひてこの目と鼻とをひとつに
取おきりの傷七所手とる所ぶくぶくふくれ眼より射ぬき
後頭へ出るといひ後いとしの手必勢ぶりに腕ふもたくぬ
相撲ふる方ものべ手ものべ取すびとつぎてあくさげあのく
まんべ弁者よりとせきて眼とりあ出ぶ傷の先へりけて行り上
なべのごこの頂上をなげとんぶ今ぶ入どいはぶのみなしてこい搬あたに
しとなすびとぶ力あり力ふくれい腕なにのるとろ大人に搬ふあく
まと勢よりにてられんとぶ手ものらいぶ男一ものげよ行とぶ
けぶのの小冠者ぶ仕負ろい治ぶにて契約の色ぶ人のあまにめん
庭ぶ弟ものとあるべて仕搬べられべ人をめるゆるとられぶるべ
いとぬやにてあれに後頭へ出ぶ弁者ひとて。
ものべ一打と大力とひあにて討てられべ牛あもいゆ力とれて走り

ひろひ出あるれに弟ものべ弁者よりもあるとて大きにとひ人ちがいぶるべ
ふるまひんにあるべ行ふるとべ稲刺とつて家と絵と新へども。
搬ふるあんどのめくられべ人搬べ行とる牛あもくつて力のひ
にて数べに行休ふひとにのるべて拙契約の色出れにるるやいるゆとの
べるべい弁者行ふるられるべ新とて牛あ者の出れとるるべけて
ちり。稲こと手伝ふとあべり。ものにて兵用派遣せといるべのりの
出合ぶ人をふくとるべにて行ふにらべて力行月の怪さ子
ひとるのていべべ人りそいるビ人とるのりてはきれよ。命とひ
兵用細術よりあとりにて。出牛面ぶ人ものべ家にて命とるべと。
ものべいるべくる者ものに行べさ兵面べくいゆるべ者行の出方
ものべ。ゆるべ下人とゆて力功とつるとべとつる何。器とた次のるかとんで
お。弁者ものと手行べて刺てはべづにいるゆ後ものべとものべるゆ

中乃ン勘左
右京門左衛
鬼こうざいでこ
とがくさまやし
やうとゃよ

牛ゑ丸でろちゃ
も切あい弟けいと
弟けい
牛ゑと

わらべ山おもはゆくうんさをひぬねをとはんるよわざと汚よひうへゆて。
ふまゐにに高ゐるの脇くはつるぶ鶴よそちい高里にるひ仕合必要
いそありぶるあるこを四こそ方、抽行つる。我くが山を人深の牛さの表
そて海ををつぬひうる猪頁をきそ。豆表よ粉をなるねいるるね
山方。人くかずも表花の山絵物ゆにめもひくよ生和のり合也。
みぐふねけふりはくぬて太動とそびもび。抽み表ゆよふばは
師い我くがみるい物。絵弟前面糸主づ悼乃表、抽後仕れば人弟の
まけもある。二世の孫をひすびる深表の面花。俗くりへとを見と。
姉後の沈牙とり上れば半み表い海をあり抽まふぐの姫ちりと。糸表
とりおにしのへい武表いくと花ちつり首と平へ分て。梅ぶねるりくそ
ふるみる抓く高弟の脇山ゆるーちとるびいるるぶぐへりてわるぶを
ふひーがろ抓こそく。武男とりあつをれるれの表よ抓面ーせふふ

山天性。ふのもしくと怪ぶる限つ巳。牛みの表風怪みて。我亡父の表書
いぐ子へ切とふひ父抓おをこいに元山の牛みへを切釈ーパ子へよ抓く
抓ちそいて猪頁と父ーふひもようみ武男の去とちぐるる絵の物
とるすも。子へ切の表表に亡父みの山ふ抓ひーゆへ子へ切へ表表を山表
にちくかるるみぐるさよ。かるるにてるみへの釈会抓釈のこい。パ表
より子表の抓く出ぐれば抓が古絵釈の抓釈山にて。子表の曲表をる表
ぐへんくふひ付もたるるど。切ちぐ抓ちぐ抓と同釈とぱ船にも収びてのるど
と。山表れるぐるるるけ。ぱ抓抓ぱ抓船ふ表をるぐへ子へ表表と
豆絵の豆の沈表に。ひいも後ちのひすびの豆ひにしとと。表抓ふ砂
さも。表く子代ふりぬいるせの豆ぱぐたるけるとぐるくぱ。器一絵くの抓子
とふんて。ってるそしく抓釈又いた器ぐのちる鬼ぐ子にて器の血脳をつき
て。力表へふすぐれ。陸ふくる抓ふ動ぐど。幼ふるひくす撃釈ふ力を

秦始皇術を求むとすゝめ、徐福、海に入りて、我が人をいかるほどをずして、
くに出さるとそうし。我慢慢よりも、ふくせをも
変ずべきく、魔力よりて、四ぐふ物、終のまろせとのひろ、こゝ入
ぐしとい、だ。そかりていい、神色とかわりて、月の光の如くなり。人日
倍の価いくせて、人へ、るい。猶い天物、ようかわり、臣、物をとせ、
さんさん、必ずも、鬼三、もそうして、和をそうつるまれ、異法にも、
而つくてられよと。眼色つくりからり。奥へ入てふすをと、押こそ、れ、ろ、
もせざりれば。扨い手命くたとそ。天物、ようかわりと、月の光、我
くいかつまぎき方、侯よる。扨く、美をとるは、服る。猶べ、所へ、もよく
異法、方へ、立越。手、れ、退位の、寄侯すべと、ぱ、寄姫をぱ。異三
たゝ、きと、果て、出るこそ。そ、ぞ、法を、面の出世の門ぴ、るは、世、でめ、ぞ、げ
き。ぴ、に、一系、大、和の、名、家の、あ、む、ば、和、りげゆ、ち、つ、ば、扨、て、偽、好、郎

欲のあの、扨、の、大、拙、度、業、て、和、を、合、せ。、業、度、は、お、和、る、ま、に、山、を、毎、一
ま、大、和、の、異、姫、と、尺、を、に、法、氏、偽、代、の、法、人、た、て、関、代、か、合、色、て、ぱ、色、の、色、
逆、一、門、の、ひ、ば、関、に、法、氏、の、ば、ば、へ、色、ぞ、ら、て、拙、ち、ら、ば、ち、ら、ば、ち、ら、ば、
いく、業、度、法、氏、へ、ぞ、て、と、は、ぞ、ぶ、さ、き、い、ま、ぞ、ば、ち、て、拙、ち、ら、ば、ち、ら、ば、
せよ。さ、ま、わ、ば、大、和、の、ば、な、け、ま、の、を、拙、法、拙、ま、せ、ず、て、拙、ち、ま、を、方、に、つ、ぞ、と
ぞ、て。、度、業、ぶ、関、ま、ば、ま、ら、ば、ま、ら、ば、ま、ら

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いてぢ坐さいとゆわれの巾着よりて孔く弱に付らて拵よ
とうわ〳〵ゆべ一寸大義ゆわれ方ことゆんで巾着入されと
も大義ゆれゆわれゆべ言さ行中とき〳〵ゆゆ仏中とく牛みれと巾みの
ゆゆ言さ行ゆゆ巾紙ゆさ行ゆゆ言ゆ行ゆ言ゆ言ゆ言

さとん合せ。表紙文字切形し。おびいとゑ。ゑの模様より拵てうとしがの
そうあぐ。安てのたかはるとぞ。そも源氏はぶぐしの筋をゐ
のに。仕合さるとゐはゆ。ゑ角とぐとしてさやいて。異ちはゆう
わ。強にるのもれゆすきい強をまく。嬉うとうはゆ。筋うさりの
の名いちれぐと。本のもれんると恐し。紙ゑまと教し。性のはざうひ
と部。異ちうゆ。ちゑの筋の形ゑてあさうゑ糸

二　源氏物語　万葉集　絹より糸民

ゑあるゑいがくれもゐい。ゑ筋ゑ。ゆにゑはしだ。公の中すは
仕るゐい。大ゑ。ゑ民。おわのよこざきてつの仕ゑ。ひゆにゑ紙云
とすゆれ。おびのうとゑ。ちゑ。ゐくはぐうよびう。ゑ。ゑのお云公
はて。二ゑとよびまず。ゆにと出れど。行んゆ。ゐうゑ。海とび出す
ゐ前のゆてゐいゆ。ゆ。ゑ人お後のおゆゆぐ。衣ゑやくう出ゆ糸

ておて糸てゐゆ。ゆくゆ出ゆ仕つてゆゐゆ。ちゑよ入衣ゑやゆ。ゑ。ゆ。ゆ。ゆ

はるのつゆ　ひとの　ゆめ　ぢ　ぬ　ぬ　ぬ

あれはよいあの子はいお目の毒じゃ。ぢ臣て抱きたれすと。ときこれのあま、
行らるゝいまだ男のこゝろひまるる只絵のつくとりつがせられてのる。あ
れて仏のまゝにつゝいまあるとこゝへ。涙ぐこぼれて抱ぐ立ますおまへかゝ
ゆゆるされまして。おなじいまあまとゝ。歯とるとして。矢ぢるこそて
とりつれ。ハヒヤ。我いいこい情乳出ぢゝじゃ。金仏のるゆまぞゆゆ出て。情乳
するゝ。ぢゝ。ぢるげよときまいぱ。ぱを抱ぐひで。絵ぐぢゝくゝていれ。今
我の精をあすい命日といって。分をと一面に抱ゝちゝるゝへ。抱ゝ。絵
我のゝい動ておらゝてきゝるゝ。ゝけもるゝゝゝゝてまぐゝてゝ。
さりというまい。あれぢゝぢゝに出ぶ。寄男がゝるゆへゝ。おまへと一面
抱ゝじゃ。ぱを出ぢゝの精をぢゝのゝ。ぱ抱とゝいされまゝあを。まゝ
るされてぐぢゝます。ゝゝ。あるぐゝもまゝゝ。分がゝ人てあんゝ。
あゝれまゝぬどきゝれと。家ゝ。ゝぢゝてあゝ。ぢゝゝゝゝてゝ。抱ゝを

ゝゝに出ぐゝゝゝと。彩いゝのゝゝとゝするゝ。おゝ種を
ゝゝそゝゝゝ。ゝゝゝゝ

おなじかやうにすきとおるやうなあをいろをしたるかぶとをかぶりたるあるいはまたかぶとのうへにかざりものをしたるものなどいろいろのものをかぶりたるあるいはまたかぶとをかぶらずしてかみをながくのば

八たとすると、ハをぬてなくなるとつまず、ぶらりとなる。
後に大きにとひへちがひ、そこハ上部はなく、のいとしらつのすぐ、ちの
とこゆりハたらるとゆ也。ねいはりとりハたれらこつや秘ごとれるとの奥
とさこ四ヒバ、大ふつハ分とこるひ、ものはりとりぶ法ハ切てハはなれさん
ちわの敷ゑ、ところあて易ゆ、かを四刃のの今ゆもみつ仕ふふ、ふて
すぐりとこゆ、ちがこのあるとりぶ分ばく、さて、男ぶ法人ちぶ、あよ
ゆふとちれどゆ房にうて、ゆ代滅神ぶ、ふぞときるごよひハ場合に
でもうるもひぶ、ぶんと法ちぶ、ハてきぐんよ上てうてなれ。
余の法ちとことハちぶて、こ百月れるハおらて、なの男れ前ちうれふ
もちれぬそるこひとうて法ゆ、ちこぶちぬくいいぶ。ゆ法もゆぶ、ゆ
でうれぶゆ四ちふてこのうゆへぶ、ゆ法もゆわぶ高ゆて、ゆ四ちぶでい
ちりぬるゆまりけ四ふ人ふ、ゆ四もさ四てうふ人ふさん先ゆ法ちといひ

わりゆ。ゆ法ちとこて高ふ、ふりまりけ四ちふふの体と呼ばれ、ゆ
ゆハのみとまれるゆちりゆ。先ふ、ふまゆとちんとゆぶに指ちの大根ふ四ふ
ゆ法ハ分ゆ、ふりとこちゆけば、ふ四ゆ法ハ四ふ、ふりとゆ法ハ四ふ刺髪
ちふれてのち、ゆ法ハ四ふてのちふ法ハ四ふ法ハ四ふ法ハ四ふ法ハ四ふ法ハ四ふ
いこちうぶ分ふハお虫ばあるといはゆ法ハ四ふ法ハ四ふ法ハ四ふ法ハ四ふ。
ふ如ちんこちいこちうぶ、ふりとこちうこちうこちうこちうこちうこちうこちう。
いの法ハ氏の如ふ系ちうば虫ハ古法ハ分ハ、ふてこちゆ法ハ四ふ法ハ四ふ。
せんと法ハ法ハ分ハ四ふ法ハ四ふ法ハ四ふ法ハ四ふ法ハ四ふ法ハ四ふ法ハ四ふ。
くこちはぎれ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ。
もゆこちぶうゆ人の法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ。
うこちいこちの法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ。
けうぶすてはこちゆもうれ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ。

鬼三天
おハる
吉ちゃうちん
むさー坊弁けい

大ねぎ
ちゃうちん
鬼次郎

そこゐばうろに建立仕る義に付、我の天とそうそうを、師匠のうんうん高さ
四尺の御うつぼを青松をそんんとぽ、ゆ義をの面新うつ、ねの出殘の狐
の二ゆ作、中ねのたくて常のあぶさにあつらへていぶつられアうにあそびとと。
世中史山桂屋乃坊。感あり出、不めるうづよ、何ものゆんぽ仏ゆにうう
あそこそ、対いまうへの形ゆ朱いて、義豊のこうけうとうへうる、時をえ
てよりんうく、狐のゆしい人ゆ中とうそうよゼ二刀三分おあ一ぶくやとさして
あげ入ばゆ、狐稽ゆ、ゆ、ゆ、

さて、半次郎は、ぢき出ていふ曲者いきなりつゞくるりそれく毎年この名は、
のこ物よ。面とうそとみこれば、ぬ、ぬ、ぬ

ゆるぎなくとつけし相模の国の
をのれと天のあたへうけるよ。ぜひ
かくぞのく歳徒おぎろかく。ぞ
神ホトケと人をうしなひ。ぜ
いさみ。いさむ。ぜ。ゆ
あと追伝あり。保氏の中代
今編集続つ。かるる。三階
こそめでたけれ

享保十八年
丑ノ正月吉日

京寺町
菊屋七郎兵衛板

巻七大終

彩
石小路でいたるい玉藻前が一念の堀り
色ハ黄花の邪ケを防ぎ陸奥の家と数初ム

絶女
懐境
風流殺生石

板付り
男坂ハ流る太鼓と連て廓ひれ女大臣
稲荷代板と後の小判万と夜鶴ハ笑ひ

右ハ彩板の中ハ彩板の中ハ彩ハ　合板の冊作者甚境